

【概要】

ハーンはアメリカでどう読まれたか

——『日本——一つの解明』を中心に

水野 真理子

1. はじめに

本発表は、ハーンの日本関連書籍をアメリカの読者がどう評価し、そこからどのような日本観を得たのかに焦点を当てたものである¹。日本観についての先行研究に関しては、ハーンを含め、作家、著名人が執筆した日本論の内容に焦点を置く研究が主流であった。しかし、人々の日本観を知るには、それらの作品がどう読まれたかという受容の側面も考慮する必要がある。そこで、ジョージ・グールド『ラフカディオ・ハーンについて』(*Concerning Lafcadio Hearn*) (1908)²の巻末に整理されている、同時代の雑誌に掲載されたハーン評・作品評の書誌情報を利用し、以下の点について考察を試みた。第一に、ハーン評・作品評を掲載雑誌ごとに整理し、概略的な傾向や特徴をつかむ。第二に、ハーンの日本関連著作の集大成である『日本——一つの解明』(*Japan: An Attempt at Interpretation*) (1904)³ (以下、『日本』と記す) に絞り、入手可能な書評の内容を分析して、作品の評価やそこに表れる日本観の特徴をつかむ。そして第三に、それら書評記事の内容、執筆者、また掲載雑誌の特徴を調査し、読者層の傾向を推測する、の3点である。

2. 書評に表れるハーン評

グールド『ラフカディオ・ハーンについて』の「9章ハーンに関する記事と批評」の書誌情報を整理すると、表1のようにまとめられる。書評のほとんどが、ハーンの日本関連書籍を扱ったものであることから、ハーンと言えは日本研究の作家とのイメージが流布していたのではと考えられる。

さらにハーンの評価については、日本の精神についての素晴らしい理解者であること、彼の優れた文学的特徴が日本の事物について描写するのに効果的であること、また日本に帰化したという境遇だからこそなし得た日本理解である、などの評価がなされている。さらに注目したいのは、ハーンを他の日本研究家や日本研究の書物と比べる視点である。例えば、ハーンにも影響を与えたパーシヴァル・ローウェル、またアルフレッド・ステッド編『日本人による日本』(*Japan by the Japanese: A survey by Its Authorities*) (1904)⁴と比較されている。その上で、ハーンはどの日本研究家よりも優れた理解者だとの高い評価がなされている。

3. 書評に表れる日本観——『日本』を中心に

『日本』の書評を分析する前に、この作品におけるハーンの意図、主眼を確認する必要がある。第1章で述べているように、ハーンは日本の不思議さ、美しさの魅力の根源を宗教に探り、日本国民の特質を、民族の信仰の歴史のなかに、そして宗教を本源とし、そこから発展した日本の社会制度のなかに見出すことを、この著作で試みようとした。さらにその際には、ハーンが多大な影響を受けていた、哲学者ハーバート・スペンサーの理論を援用して、日本の不思議さに、科学的、合理的な説明を施すことを試みた。スペンサーは大著『総合哲学体系』(*System of Synthetic Philosophy*) (1862-1892) の、『社会学原理』第3巻(*The Principle of Sociology*) で、最古の祖先崇拜は霊(ゴースト)への祭礼に始まり、神道の祖先崇拜は埋葬の儀式から発達すると述べていた⁵。ハーンの見解では、日本の祖先崇拜の発達過程は、スペンサーの社会進化論における宗教発達の法則を証明するものと考えられた。

それではハーンの意図を確認したところで、次に『日本』についての書評に目を転じよう。書評には以下の6種類があった。①無署名、『インディペンデント』(1904年10月27日) ②無署名か、『パブリック・オピニオン』(1904年10月27日)(今回、未入手) ③ウィリアム・グリフィス、『ダイアル』(1904年12月1日) ④無署名、『ネイション』(1904年12月8日) ⑤エドモンド・バックリー、『アメリカン・ジャーナル・オブ・ソシオロジー』(1905年1月) ⑥ウィリアム・グリフィス、『クリティック』(1905年2月)である。ここにはたとえば、ウィリアム・グリフィス『皇国』(*Mikado's Empire*) (1876)と比較し、ハーンは神道の祖先崇拜、政治・道徳への影響力について「より完全で、親密な記述」を成しえたとの指摘(⑤)や、心情的な側面を強調する前作までの特徴と異なり、『日本』は科学的な手法で描写されている、そして日本の社会制度はまさに祖先崇拜のうえに成り立っているとの指摘(③)がある。したがって、評者たちはハーンの意図をおおむねよく理解し、『日本』を読解したようである。

しかし、科学的な説明をハーンが施し、それが理解された一方、依然としてハーン評や書評には、合理的な説明のつかない不可解な国、神秘的な国日本のイメージが貫かれている。例えば、日本人は、外面は、条約、外交、政府、法典、帝国議会、軍隊、艦隊など、すべて近代的で客観的なものに覆われているが、内面は、ゴーストによって支配されているとの指摘(⑥)がある。またハーンの遺作となった『天の河縁起』(1905)の書評でも、「日本は天の河のもとに横たわるファンシーを咲かせた豊かな土地」「日本の土地は酸素に乏しくゴブリンたちがひしめき合っている」「竹と桜の国の農夫や詩人たちの奇妙な想像力を理解することにおいて、ハーンを超えられる作家はいなかった」(『インディペンデント』1905年12月21日)など、神秘的で不可思議、おとぎ話のような異国情緒に溢れた日本イメージが、受け継がれている。

なぜこのような評価や印象が貫かれたのか。そこには、『日本』の冒頭で記された、日本に

関する奇妙さ、不可思議さ、神秘さを表現する記述が印象深いこと、また西洋的価値観では日本の精神がやはり理解しがたいものであったことが、一因としてあるだろう。

4. ハーンの読者層

以上述べてきたような日本イメージ、すなわちスペンサーの理論に当てはまる神道の国、祖先崇拜の国、しかし依然として理解しがたい不可思議な国日本、というものが書評から推測された。それではこの日本観はどのような読者に引き継がれたのだろうか。

読者の傾向を見るために、まず雑誌の特徴を明らかにしよう。書評が掲載された雑誌は、『ネイション』『クリティック』など、政治、文学に特化したオピニオン雑誌である。また、読者でもある評者の傾向はどうであろうか。それは政治的な関心の高い評者たちである。ハーンが、『日本』において、近代化を成し遂げ、西洋列強の仲間入りを目指す日本の将来と西洋諸国との関係について関心を向けていたように、評者も日本の国のありかた、政治、西洋諸国らをめぐる国際関係に強い関心を抱いており、日本の政治的行動の根幹にある神秘性や精神的側面をハーンの著作から正確に知りたいと思っていたようだ。そこには、日本が日清戦争で勝利し、国際舞台に躍り出てきたという社会的背景が影響しているだろう。また、『クリティック』の女性編集者レオナルド・ギルダーや、ハーンの生涯の友人エリザベス・ビスランドが象徴しているように、ジャーナリズムに登場した知識人女性編者、読者の存在も否定できない。

これらの読者層との違いを対照的に示すのが、ハーン作品と同時代に流行していたジャポニズム小説の読者層である。ジャポニズム小説は、ジョン・ルーサー・ロング「蝶々夫人」(“Madam Butterfly”)(1898)などに代表される、1880年代から1920年代頃にアメリカで流行した小説群である。日本人の生活習慣、日本の史実が織り交ぜられるが、そこには間違いも多く、描かれる日本人娘も外見は日本人の姿であるが、行動様式はアメリカ人女性によく見られる特徴を帯び、日本人女性の描写としては不自然さが見られる。しかし、ジャポニズム小説の読者たちにとっては、ハーン作品に求めたような正確さは問題ではなく、感情移入できるかどうか、また疑似ジャパニズム体験ができるかが重要であった⁶。ジャポニズム小説の掲載誌は、女性を主な読者とした『レイディース・ホーム・ジャーナル』などの家庭雑誌だったが、それらも、ハーン書評が掲載された雑誌との相違を示していよう。

5. おわりに

以上述べてきたように、アメリカにおける、同時代の読者たちによるハーンの評価は、優れた真の日本理解者というものであり、ハーンを通して得られたと考えられる日本観とは、科学的に説明できる祖先崇拜の国、神道の国でもあり、また依然として説明の難しい不可思議な国

日本であった。そしてこうした日本観が、政治的関心の高いリーダー的、エリート的な読者層に受け継がれた。ハーンを通じた日本観が、その後どう継承され、あるいは変容していくのかは、今後明らかにしていくべき課題である。たとえば『武士の娘』（1925）がアメリカでベストセラーとなったエツ・スギモトの初期のエッセイには、日本の類まれな清潔さや妖精のような日本人など、ハーンの日本に対する印象と似通った記述が見受けられる⁷。またアメリカ陸軍情報将校のボナー・フェラーズは、ハーンのエッセイの愛読者でもあり、彼が書いた報告書「日本兵の心理」（1936）には、巻末の参考文献に『日本』を含むハーンの著作が載せられ、フェラーズの日本論がハーンの著作の多くに依拠していることがわかる⁸。このように、日本関連の書籍を著した著述家たちに、ハーンは様々な影響を与えたようである。したがって、この日本観というテーマをより敷衍させ、19世紀から20世紀初頭に形成されたその日本イメージを、体系的に分析していくとすれば、その中でハーンは、日本観の一つの型を提示し、後世に影響を与えた作家として、特に重要な位置を占めるであろう。

(表1)

ハーンに関する記事と批評

掲載誌	種類	出版地	日本関連書籍の書評・ハーン評数および内訳(1894-1908)
1. <i>The Academy</i>	雑誌	イギリス	6 『仏』『日本』『天の河』、ハーン評、『手紙』、 作品リスト
2. <i>The American Journal of Sociology</i>	雑誌	アメリカ	1 『日本』
3. <i>The American Monthly Review of Reviews</i>	雑誌	アメリカ	1 ハーン評
4. <i>The Athenaeum</i>	雑誌	イギリス	10(1) 『面影』『東』『心』『異国』『影』『雑記』 『骨董』『怪談』『天の河』『書簡』（『ユーマ』1890）
5. <i>The Atlantic Monthly</i>	雑誌	アメリカ	7 『面影』『東』『霊』ハーン評(3)、『怪談』
6. <i>The Author</i>	雑誌	アメリカ	(1) (ハーン評、1890)
7. <i>The Bookbuyer,</i>	雑誌	アメリカ	4 ハーン評(2) 『心』『骨董』
8. <i>The Bookman</i>	雑誌	アメリカ	3 『影』『怪談』ハーン評
9. <i>The Chautauquan,</i>	雑誌		1 『怪談』からの抜粋
10. <i>The Chicago Evening Post</i>	新聞	アメリカ	1 ハーン評
11. <i>The Critic</i>	雑誌	アメリカ	6 『仏』『影』『日本』ハーン評(3)
12. <i>Current Literature</i>	雑誌	アメリカ	4 『心』ハーン評(3)
13. <i>The Dayton, Ohio, Journal</i>	雑誌	アメリカ	2 ハーン評(2)

14. <i>The Dial</i>	雑誌	アメリカ	5	『異国』『影』『日本』『天の河』ハーン評
15. <i>The Evening Sun, NY</i>	新聞	アメリカ	1	ハーン評
16. <i>The Evening Post, NY</i>	新聞	アメリカ	1	『手紙』
17. <i>The Evening Transcript, Boston</i>	新聞	アメリカ	(1)	(『チタ』1889)
18. <i>The Fortnightly Review</i>	雑誌	イギリス	1	ハーン評
19. <i>The Harper's Monthly</i>	雑誌	アメリカ	(1)	(ハーン評1887)
20. <i>The Independent</i>	新聞	アメリカ	3	『仏』『日本』『天の河』
21. <i>The International Studio</i>	雑誌	アメリカ	1	作品評(Stories and Sketches)
22. <i>The Literary World</i>	雑誌	アメリカ	5	『面影』『東』『心』『仏』『雑記』
23. <i>The Living Age</i>	雑誌	アメリカ	1	ハーン評
24. <i>The Messenger</i>	雑誌	アメリカ	1	ハーン評
25. <i>The Nation</i>	雑誌	アメリカ	10(3)	『心』『仏』『影』『雑記』『骨董』『日本』, <i>Stories and Sketches</i> , 『天の河』『手紙』ハーン評 (『ゴンボ・ゼーブ』1885、『中国霊異談』1890、『ユーマ』1891)
26. <i>The Nineteenth Century and After</i>	雑誌	アメリカ/イギリス	1	ハーン評
27. <i>The North American Review</i>	雑誌	アメリカ	1	『手紙』
28. <i>The Outlook</i>	雑誌	アメリカ	2	『仏』『天の河』
29. <i>Poet-Lore</i>	雑誌	アメリカ	1	ハーン評
30. <i>Public Opinion</i>	雑誌	アメリカ	3	『仏』『影』『日本』
31. <i>Putnam's Monthly</i>	雑誌	アメリカ	1	ハーン評
32. <i>The Spectator</i>	雑誌	イギリス	5	『面影』『東』『心』『仏』『日本』
33. <i>The Times-Democrat, New Orleans</i>	新聞	アメリカ	4	ハーン評・作品評(3)
34. <i>The Times, New York</i>	新聞	アメリカ	1	『手紙』
35. <i>The New York Tribune</i>	新聞	アメリカ	2	『手紙』ハーン評

※略記～『知られぬ日本の面影』(1894)：『面影』、『東の国から』(1895)：『東』、『仏の畑の落穂』(1897)：『仏』、『霊の日本』(1899)：『霊』、『異国情趣と回顧』：『異国』(1898)、『日本雑記』(1900)：『雑記』、『日本——一つの解明』(1904)：『日本』、『天の河縁起そのほか』(1905)：『天の河』、エリザベス・ビスランド『ラフカディオ・ハーンの生涯と手紙』(1906)：『手紙』

1本発表は、マイグレーション研究会の共同研究「『移民・越境者』たちの日本観」における研究成果、水野真理子「ラフカディオ・ハーンはアメリカでどう読まれたか—『日本—一つの解明』を中心に」河原典史・木下昭編著『移民が紡ぐ日本—交錯する文化のはざままで』（文理閣、2018年3月刊行予定）に基づき、内容を加筆修正したものである。

2 Gorge M. Gould, *Concerning Lafcadio Hearn*, (Philadelphia: George W. Jacobs and Company, 1908).

3 Lafcadio Hearn, *Japan: An Attempt at Interpretation*, rev. ed. (1904; repr., New York: Macmillan, 1924); ラフカディオ・ハーン、柏倉俊三訳注『神国日本—解明への一試論』（平凡社、1976）。

4 Alfred Stead ed. *Japan by the Japanese: A Survey by Its Authorities*. 2 vols. rev.ed. (London: William Heinemann, 1904; Washington D.C.: University Publications of America, 1979).

5 『哲学事典』（平凡社、1971）；『ブリタニカ国際大百科事典』（ブリタニカ・ジャパン2013）。

6 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界』（彩流社、2005）、49-62。

7 Etsu Sugimoto, “In the Land of the Mikado,” *The Brooklyn Daily Eagle*, June 1, 1902.

8 Bonner F. Fellers, “Psychology of the Japanese Soldier” (individual research papers, Command and General Staff School, 1935),

<http://cgsc.contentdm.oclc.org/cdm/ref/collection/p4013coll12/id/802,27-46>.